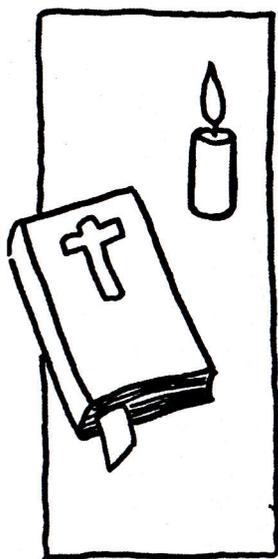


キリスト教入門講座で

学びながら(その四)

土屋 至



● 第三ステージの展開

入門講座の第三ステージのテーマは「教会と出会う」である。ここでは「信仰を持って生きる」ということを教会の教えを学びながら、現代社会で具体的にどう展開していくかを考える。

このステージの各集いの構成は以下のようになる。

- ① 現代人の救い
- ② 信じるということ
- ③ 洗礼
- ④ 聖霊について
- ⑤ 聖体の秘跡
- ⑥ ミサ
- ⑦ 罪とゆるし
- ⑧ キリストの教会
- ⑨ 愛と性
- ⑩ 秘跡としての結婚
- ⑪ 生と死を考える
- ⑫ 永遠の生命
- ⑬ キリスト教の歴史
- ⑭ 日本の教会の歴史から学ぶ
- ⑮ 愛と信仰に生きた人たち
- ⑯ 入門講座で学んだこと

洗礼の秘跡について学びながら「信仰をもって生きる」とはどういうことかを分かち合い、ゆるしの秘跡を学ぶと共に「現代人の救いとは」を考え、婚姻の秘跡を学びながら「愛と性」の問題や現代の結婚や家族のあり方を考え、叙階の秘跡を学びながら教会共同体の仕組みを知り、塗油の秘跡を学びつつ「生と死」そして「永遠の生命」を考えるという展開になっている。

単に教会の教えとしての秘跡を学ぶだけでなく、それが現代社会にはどのような問題となって表れているかを発展して考える。

●——信仰を持って生きるということ

洗礼の秘跡をテーマとするこのステージの始めの方の集いでは、信仰を持って生きるとはどういうことかを分かち合う。このときにとっても助けになることは、すでに洗礼を受けた人たちの分かち合いである。

まず最初に、「信じる」とはどういうことか、「信仰を持って生きる」とは、どう生きることなのかを問いかける。この集いは受講者が洗礼を受けることを決断するときに、その決断の助けとしてもっていきのがよいと思う。入門講座のクライマックスでもある。

さてどんな答えがあがってくるであろうか？ 読者のかたがたも、自分で答えを考えてほしい。

入門講座では皆があげた答えを黒板や模造紙に書き連ねていくようにする。答えとしてあがってきたことを以下に列挙しよう。

* 毎週日曜日に教会に行く * 教会の献金を払う
先ずこういう具体的なことがあげられるはずである。

傑作として受け入れ、かけがえのない人として愛することができるといえる * どんな逆境にあっても希望と喜びをもって神に信頼して生きることができるといえる
核心に迫っている指摘だと思ふ。こう生きたいと確かに思う。そういう願いを持って生きることなのかもしれない。

「まだ出ていない答えがあるはず、たとえば教会には日曜日に行つて、献金を払えばそれでいいのかな？」とヒントを与える。

* ローマ教皇を頭とする世界の教会の信徒と連帯感をもつ * 教会共同体の一員として、教会の活動に参加する * 教会の伝統の価値をみとめられる

* 教会がこの世における「神の国」の具体的なあらわれであることを信じ、それにふさわしくなりたいと願ひ、そのために努力している * 死んでも魂は不滅であることを信じ、天国に希望を託すことができる
きる

「自分だけの信仰であつていいのだろうか？」とも問ひ返す。

* 自分がクリスチャンであることをカミングアウトして生きる * 周りの人にも救われているという喜

* 神の存在を信じて生きる * イエスが、救い主キリストであることを信じる

このような抽象的な答えがあげられたときには「確かにこれも重要な答えだけれど、それは具体的にいうとどういふことをさらに考えてほしい」と問ひ返す。

* 毎日の生活のなかで祈る習慣を持つている * 生活のなかでしばしば聖書を読む * 定期的に「ゆるしの秘跡」を受ける。自分の罪がそれによってゆるされることを信じる * 「信仰宣言」にある信仰箇条を信じる * 十戒と教会の掟を守つて生きる * 悪を避け、罪の誘惑に陥らずに善を行う

これを守つて生きていくのは結構大変そうである。受講者もこういうことをいわれると自信をなくして洗礼を受けようと踏み切れなくなるのではないか。信者でも自信を持つて言い切れる人は多くはないことをつけ加えなければなるまい。

* イエスの示された愛を實踐して生きる * 「小さくされた人」「見捨てられてゐる人」の立場に立つて行動する * お金とか名誉とか安定した生活とかの世俗的な価値よりも大切な価値を求めて生きる * こんな自分を含めてどんな人でも神さまの最高の

びをもたらすことができる * 人々に福音を告げることができるといえる * 自分の生きてゐる場を少しでも福音的にするように努める

ずいぶんたくさんあがつてきた。まだ挙げられるだろうが、このあたりでやめておこう。これまで挙げられたことを振り返つて、「この中でもっとも大事なことは何だろうか？ キリスト者だけにあつて、信仰を持つていない人にはないことは何か？」と問ひかけよう。

どれも一番大事であるかをいうのは難しい。人によつてもその答えが違い、結局は正しい答えはないのではないかと思ふ。そう言つて終わつてしまうのも何か無責任であるような気がするから、「私の気に入つた答え」を紹介する。それは「神の呼びかけにこたへるという生き方を選択する」というものである。こたへればすべてを言い尽くしてゐるような気がするのだが、どうだろう。

●——キリストを知ること

そして最後に次の話を読む。アントニー・デ・メロである。これも気に入つてゐる「答え」だ。この話を

読むと妙に納得してしまうから不思議である。

最近、キリスト教に改宗した人と、信仰を持たないその友人との間の会話。

「そこで君はクリスチャンになったというわけだね?」「そうだよ。」

「では君は、キリストについてたくさんを知っているにちがいない。話してくれたまえ。彼はどの国に生まれたの?」「知らないよ。」

「死んだとき何歳だったの?」「知らないよ。」

「彼がした説教の数は幾つ?」「知らないよ。」

「君はキリスト教徒になったけれど、キリストについてほとんど知らないんだな?」

「そのとおりさ。キリストについてほとんど知らないことが恥ずかしい。でもこれだけは知っている。三年まえ、ぼくは酔っぱらいだった。借金があった。ぼくの家族はばらばらになってしまった。妻と子供は、毎晩、ぼくが家に戻るのを怖がっていたんだ。」

でも今、ぼくは飲むのをやめた。借金もない。ぼくの家はしあわせだ。子供たちはぼくの帰りを毎晩とても待ち望んでいる。これはみんな、キリストがぼくにくれたんだ。ぼくはキリストについて、このこ

*常に追われている自分が立ち止まってはつと我に返るとき *今日の聖書と今日の説教の話は何だったつけ?

入門講座もここまでくると、皆とても率直でありのままを分かち合ってくれる。模範解答では決してないが、それがいい。それでいい。

生涯もつとも印象に残っているミサはどういうときにどこであずかったどんなミサか? ある老婦人が話してくれた答えが忘れられない。

*バチカンであずかったミサの平和の挨拶の時にひげずらのヨーロッパ人男性から抱きしめられちゃった *私たちの結婚記念日の日のミサで神父さんが突然祭壇からおりてきて、私たちを祝福してくれた。よくぞおぼえていてくれたと感激した

元氣の出るミサというのはどういふのかな?

*聖歌隊がへたくそで、これは歌わねばと大声で聖歌を歌ってしまったミサ *両形態でおん血をたっぷり飲めたミサ

と、これはお酒の好きな男性。何を考えているんだ。*お説教がとてもいい話で励まされたとき。逆にできそうもないことばかりすすめられたときはどっか

とだけは知っているんだ!

ほんとうに知ることは、知っていることよって人間が変わることです。(アントニー・デ・メロ著『小鳥の歌』谷口正子訳 女子パウロ会 より)

●「ミサ」をテーマとする集い

この集いでは、ミサの次第やあずかり方を説明するのだが、次の問いかけがよい。これも洗礼を受けている信者の存在が必要である。

「ミサにあずかっているときには心の中はどうなっているのかを分かち合ってほしい。何を考えているのか、何を祈っているのか?」

*過ぎ去った一週間の振り返り、来るべき一週間を思いめぐらしている *今日はあの人に来ていた。

あの人は最近見えないけれどどうしているのかな?

*今晚のおかず、何にしようか? *あの子は元気で、大きくなったな。あの子はとても退屈そうだ。

無理もないや *もうじき定期試験だ。試験の勉強をしなくちゃ *あのとときはまずかつたな。みんなに迷惑をかけちゃった。どうおわびをしようか

*私が活けたあの祭壇の花、結構いい線いっている

と重荷を負わされた感じで疲れる

*となりに座っていた、顔はよく見るけれど、名前を知らなかった人と挨拶をして知り合えたとき

●と、こんな具合に講座は展開する

信徒が担当する入門講座というのはどういう特徴があるのだろうか? 私にはよくわからない。もちろん司祭やシスターが担当するものや、伝統的な「公教要理」にもそれぞれ良さがあることは否定するつもりはない。それは担当者の個性であって、司祭だから、あるいは信徒だからという特性はないのかもしれない。

「罪とゆるし」や「愛と性」あるいは「生と死を考える」というテーマでも、もつと分かち合いたいことはたくさんあるが、ここで紙面が尽きた。私の講座は、飛び入り、冷やかしのぞき見など歓迎している。あとは直接参加していただくか、あるいは講座のテキストを注文していただくかしかない。

いつか、インターネットの双方方向性を活かして、こういう入門講座が展開できないだろうか、と構想している私である。

「おわり」

(つちや・いたる/清泉女学院中学・高等学校教諭)